

単音節語「あ」に内在する 直観的判断と分析的判断について

松岡 みゆき

1. はじめに

本稿は従来、感動詞に分類される「あ」について、その内実を明らかにすることを目的とする。まず、これまで「あ」がどのように捉えられてきたかを確認し、それが十分なものではないことを示した上で、「あ」に何が内在しているかを探る。

2. 先行研究とその問題点

まず、国語辞典における「あ」の意味記述を見ると、「あ」は「呼びかけ」「応答」といった言語行動、または「急に思い出す」「驚く」といった話手の認知的事象を表すものとされている¹⁾。これらは「あ」を運用した結果、現れる機能として内省に合ったものである。しかし、これらの意味記述は、他の表現との差異を確認すべき余地を残したものである²⁾。より根源的な「あ」の機能を示すことによってこそ、上記のような次元の異なる観点での複数の結果的機能を導く「あ」の構造全体が示せる。

次に感動詞「あ」に関する先行研究を見ると、「あ」は話手の「新たな情報や事態」に相対した際のそれぞれ異なる観点の話手内部の在り方を記述している。例えば森山(1996)は、情動を「泉」に例えるモデルを用い、感動詞を次のように分類している。

内発系感動詞：内部から沸き上がるタイプの情動

遭遇系感動詞：何かの状況に遭遇してそれをきっかけとする急激な情動の変動を表すもの

「あ」はこの分類において「驚き、つまり未知の事態との遭遇に対する反応として最も未分化な形式」(p.56)とされている。

また、田窪・金水(1997)は「あ」「あっ」「はっ」等を「自分で発見した情報を新規に登録する際の標識」であり、「予期していなかったにも関わらず関連性の高い情報の存在を新規に登録したということを表すもの」というように、記憶の情報処理システムの観点から記述している。

富樫(2005)では、同じ「驚きを表す」形式であると考えられている「わ」との共通点と違いを考察する中で、「あ」を「変化点の認識を示す」「心内で何かに変化したことを表す」形式であると記述している。

このように従来から「あ」はおおよそ(それが新規のものか否かは別として)情報や事態に遭遇した時の反応(情報処理、心的変化)であると考えられている。これが「あ」の一側面を捉えたものであることは間違いないが、考えてみれば情報との遭遇は随時起こっており、その中で「あ」を用い、それを表明するのはどのような時であるのか、また、情報・事態との遭遇、その反応とは一体何なのか、

その実体を示さなければ、結局「あ」の内実は不明なままであり、その生起を予測することもできない。

3. 考察

本節では前節で述べた問題点を踏まえ、「あ」の根源的な機能を明確にすることを目的として考察をおこなう。考察は会話の中の「あ」とその前後の発話を対象として取り出し、「あ」が何を刺激として発せられ、また「あ」に後続する発話が「あ」とどのような関係にあるかを考察する。前述の通り、本稿の目的は「あ」の根源的な機能を明らかにすることにある。量的な問題も含め、自然会話のデータを用いた考察が必要であることは言うまでもないが、「あ」の取り掛かりの研究として、本稿では、まずは談話展開が分かる程度まで伝達内容が非言語情報に委ねられることなく明示され、また非言語的手段が用いられても、それが時間的に切り取られ、可視化されているドラマのシナリオ、ライトノベル、漫画の中の会話を用いる³⁾。

また、扱う例文には「あ」の他、「あっ」と表記される例も扱う。「あっ」は「あ」が促音化したものである⁴⁾。このような「あ」の具体物としての使用に見られる音声変化については、「あ」の本質に対する答えを得た段階で言及する。その前提として促音化した「あっ」が「あ」に本質があると考えた根拠を考察の中で示す。以下では「あ」の使用を5つのパターンに分け、それぞれ3.1節、3.2節、3.5節、3.6節、3.7節で考察をおこなう。

3.1. 外界の知覚事象に関する判断

初めに、環境の事物・出来事の知覚(以

下「外界事象」または「(外界の)知覚事象」と表現する)によって生じる反応としての「あ」を取り上げる。次の例で「あ」は、外界の知覚事象について、いわゆる「同定」判断⁵⁾をしていると考えられる。

(1) X: あ

Y: 何?

X: 救急車 (筆者が経験した例)

(1)の例で「あ」は外界事象(A=救急車)を視覚で捉え、それが「救急車」(B)であると同定したことを内包すると考えられる。つまりこの場合、「あ」に内在するのは「AはBである」という同定判断の形で表し得る。同定した名前(B)が「あ」に後続する形で明示される例が(2)である。

(2) さおり: あっ、モスキートウ

トニー: それは「モスキート」だよ

(ダ2)

同定内容が顕在化されない(1)の例において、聞手はその同定内容が何であるかに関して「何?」という問いを発する。話手が同定内容を聞手の「何?」という問いにより言語化することにより「AはBである」という話手の同定判断が聞手に共有され、それにより言語場が成立する。一方、(2)は話手が同定内容を顕在化させている。その場合、次に来る聞手の発話は、既に同定内容が共有されているため、その同定内容に対して肯定または否定するものとなる。(2)でトニーは、さおりが蚊の存在を視覚で捉え、同定した内容「外界事象はモスキートウである」を共有しているからこそ「それ(外界事象)はモスキートである」というように否定することができる。また、以上のことは促音化の有無に関わらず、「あ」であっても同様のことが言える。本稿が捉えよう

としている「あ」の本質は促音化の有無には関わらないのである。

知覚事象が他者である場合も同定判断とみなすことができる。次の(3)は話手が相手の存在を視覚で捉え、「有川さんである」と同定している。結果的には知覚事象である他者への「呼び掛け」となる。

(3) A: あ、有川さんだ。こんにちは～
(有川、気付かない) (い)

次の(4)はBが後続する形で明示されない。

(4) (雑貨屋から出てきたみくり。風見とぼったり)

風見: あ

みくり: ああ! どうも

風見: 買い物ですか (逃)

これは呼び掛けに使われる「呼掛詞」が運用される際の特徴として森重(1959)が述べている下記の理由により説明できる。

「呼掛けられる汝が表出されず、さらにその呼掛けに連関のある文が、呼掛詞にすぐ続いた形で表出されることが多い。これは、汝への呼掛け自体が、むしろその連関のある文表現のための一種の発語であることが多いからである。」(pp.203-204)

ここまでの考察で「あ」に内在してきた同定判断「AはBである」の内容が「あ」の後に顕在化する、この在り方を「あ」からの「分出」と捉える。「あ」に後続する「AはBである」が内在しているが、それをあえて「あ」の後に明示するのが「分出」である。

また、次のように、知覚事象が事物ではなく事態である場合は、所謂「同定判断」には該当しない。しかし、ここでも、知覚事象の内実を「判断」しており、それ

は「AはBである」という形で表すことができる。その判断した内容の描写・説明に当たる表現が「あ」に後続する形で「分出」している。下記の例では、分出した部分を二重下線で示す。例えば(5)では「知覚事象(A)は、そのページを閉じてしまったという状況(B)である」という判断、(6)は自身が書き損じた字を見て、「知覚事象(A)は、またやったという状況(B)である」という判断が考えられる⁶⁾。

(5) トニー: あっ

さおり: どーした!?

トニー: 今見てたページの内容を取っておきたかったからコピーしようとして……なんか指が混乱して、そのページ閉じちゃった……

(ダ頭2)

(6) さおり: あっ、またやった。もうこういう字ってことにしてくれないかなー

トニー: どうしたの (ダ頭2)

先の(1)～(4)の例との違いは、知覚事象が事物であるか事態であるかの違いである。(1)の事物の場合、聞手が「何?」と問うのに対し、(5)の事態の場合は「どうした?」と問い、その他の談話展開の在り方は対応している⁷⁾。外界事象(A)について、それを同定または内実を「Bである」と判断する。それが「あ」に内在する機能であると考えられる。そしてその「あ」に内在するもののうち、判断内容(B)の方は「あ」の後に現れ出る(「あ」に後続する表現内容がこれに当たる)。これが「あ」からの「分出」である。

次に次小節で、外界の知覚事象ではなく、言語場で発せられる聞手または話手自身の発話内容を「A」とし、同様の判断

(AはBである)を内在している「あ」について考察する。

3.2 前文を合入し、それに対する判断を分出するもの

外界事象ではなく、聞手(言語場を共有する相手)または話手自身の前出の発話(以下ではこれを「前文」とする)に対して判断をおこなう場合がある。下記の例では、前文(A)に当たる箇所を波線で記す。

(7) トニー：昔福建省廈門周辺で今の「ケチャップ」に近い発音の言葉があつて。意味は「魚の汁」

さおり：さ……魚の汁!?

トニー：そう魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁

さおり：あ「魚醤」ね。日本でも「しょつつる」とか「いしる」があるね (ダ頭2)

この例における判断(AはBである)の内容は、「魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁(A)は魚醤(B)である」である。次の(8)は「(贈り物の贈り先が)奥さまかどうか(A)は『いえ(奥様ではない)』(B)である」という判断が考えられる。

(8) コンシュルジュ：何をお探しでしょう

津崎：……女性への贈り物なんですが

コンシュルジュ：奥さまですか？

津崎：あ、いえ

コンシュルジュ：妹さん (逃)

同様に(9)は「本か何かを見せてもらえるかどうか(A)」について「本を持ってきていない(B)」と判断したと考えられる。

(9) (現在アメリカ東部に住んでいる家族のもとへ……)

義母：漫画家なんですって？本か何か……見せてもらえる？

さおり：あ……持ってきてないです

……

(ダ2)

これらの例において「AはBである」は「Aは-A(Aではない)」という関係にあり、それが「あ」の使用を誘発していると考えられる。つまり「奥さんかどうか」は「奥さんではない」、「本を見せてもらえるか」は、「本を持ってきていない」、よって「本を見せてもらえない」、(7)については「魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁」は、「魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁」という表現)ではなく、「魚醤」という表現)だという「AはAではない」という構造である。話手は聞手の判断や意向が現実と相違のあるものであることを、「あ」によって、その時点で判断したこととして示す。相手の判断が現実と異なることを話手自身も気づいたものとして示す。これがここで「A(あなたの判断)はB(-A)だ」を内在する「あ」を用いる理由であると考えられる。

3.3 分出と合入について

ここまででA、つまり「あ」を生じさせる契機となる刺激(以下、弁別刺激⁸⁾)として外界事象と前文の2つを挙げた。「あ」はこれらの弁別刺激に対する判断である。つまり「あ」に内在するものの一部がこの弁別刺激である。これは森重(1959)の用語を借りれば、「その表現(ここでは「あ」)に合入する」ということに当たる。合入とは、ある概念を当該の語の表す意味の中にもみ入れることである。3.2節で挙げた例のように、前文そのものに対して判断をおこなう場合はAは限定的となるが、それ以外のAは話手が視覚、聴覚等で知覚した外界事象を可

能体として受け取ったものである。それは当該事象の属性の集合(総体ではない)である。そしてその合入したAについておこなった判断がBであり、それは「あ」に内在しているが、そのBをあえて「あ」から出して示すのが「分出」である。つまり「あ」は、外界事象または前文(A)を「合入」し、それに対する判断(B)を分出するのである。ここまでの考察は下記のようにまとめることができる。

(10)「あ」はA(外界事象または前文)を「合入」し、「AはBである」という判断が内在する。「あ」に後続する形で、その判断「Bである」が「分出」して表面化することができる。

A(外界事象/前文)—合入→「あ」(AはBである)—分出→B

3.4 外界事象合入(3.1節)と前文合入(3.2節)の「あ」の違い

ここで3.1節でみた外界事象の合入の場合と3.2節でみた前文合入の「あ」の違いを考えてみたい。まず、両者の違いは「あ」の付与の必要性にみられる。外界事象の合入の例は(11)のように外界事象に対する「気づき」を示すため、前文合入の例より「あ」の必要性が高い。前文合入の例は発話状況から、当該発話が所謂「情報提供」であると考えられ、(12)のようにBの提示があれば本来の目的が達成される。3.1節は外界事象の合入(弁別刺激の受入)にこそ、その発話意義が存在する。そのため、外界事象を合入する例のほうが前文を合入して、その判断を示す例より「あ」の必要性が高いのだろう。

(11) みくり： やっさん、今日は食べよう。私の奢りだから！

安恵： デザートもね。{あ/??φ}、これいい!さりげなく可愛いランジェリー。

みくり： かわいい……。 (逃)

(12) 店員： どうかされましたか？

トニー： これは…どこのワインですかね？

店員： カリフォルニアです。

トニー： あ、そう…どこか別の種類はないかな？

店員： {あっ/φ}別の地方のものもありますので今持ってきますね。

無論、「あ」を用いずに分出内容(B)を一語文として感嘆をもって発話することもできる⁹⁾。しかし(13)の「さおり」の発始の発話のように文が長くなると情報提供として解釈されやすく、「発見性」やそれに対する驚き等の情意が現れにくい。

(13) さおり： {あ/φ}お兄ちゃん誕生日忘れてた……。

トニー： いつだったの？ (ダ頭2)

前文で述べられた内容のように特定の限定的なAに対して「Bである」と判断をおこなう前文合入の例は自覚的で分析的である。これを本稿では「分析的判断」とする。これに対し、外界事象を話手なりに知覚しておこなった(その可能体から取り出す属性が話手の知覚に委ねられている)判断を「直感的判断」とする。

外面的には外界事象の合入の例の方が、2節で見た辞書の記述に見られる「驚き」「思い出し」の意味が前文合入の例より強くなると考えられる。これは前文合入による判断が予測内のものであるのに対し、外界事象合入のものは予測性のないものであるためだと考えることができる¹⁰⁾。

3.5. 前文が外界事象となり、その合入された外界事象に関して判断をおこなない、それを分出するもの

下記の例では、3.2節と同様、相手の発話、つまり前文を受ける形で「あ」が使われている。

(14) トニー：日本語の「大」と「小」って便利だよー

さおり：あれ？英語にはないの？

トニー：下品でも子供っぽくもない表現は思いつかないね。病院とかで使う言葉はあるんだけど友人同士では言わないし……「NO.1」や「NO.2」もちょっと子どもっぽいなあ……

さおり：あっ中国語でも「一号」と言えば「小」のことでトイレを指す時もあるよね

トニー：基本的には日本と同じ「厕所」が多いと思うけどね（ダ頭2）
但しこの場合は、前文の内容に対して判断をおこなうものではない。前文は、そこに含まれる情報の一部を、所謂「トピック」として取り上げられているに過ぎない。つまり前文の一部をトピックとして取り上げ、そのトピックに関する判断をおこなっているのがこの場合の「あ」であると考えられる。例えば(14)の例では前文の「『NO.1』や『NO.2』」をトピックとして合入し（当該箇所にも二重下線を施す）、それについて「中国語でも『一号』と言えば『小』のことでトイレを指す時もある」と判断している。この「NO.1（やNO.2）」は中国語でもトイレを指すことがある」という判断が「あ」に内在していると考えられる。そしてその判断内容（B）が「あ」に後続することはこの場合も変

わりない。次の例は前文が話手自身の発話である場合である。話手自身の「トイレに行く」という話題から「トイレ」をトピックとして合入し、「トイレは『お手洗い』とも言う」という判断（B）をおこなっている。「あ」を入れて「Aは」Bであると示すことになり、それにより区切りができる。それにより間髪入れずに次々と情報提供することで生じる畳み掛けるような印象が薄れる¹¹⁾。

(15) トニー：そうだね。「トイレに行く」って少し恥ずかしいけど行かないから少しでも楽しくみたいな

さおり：日本では山に行ったときくらいかな

トニー：タイでも女性はそう言うんだって。男性は「ウサギ狩りに」。あっトイレのこと「お手洗い」とも言うでしょ。それ「みたらし団子」と関係あるんだって

さおり：ええっ（ダ頭2）

これらの前文の内容の一部をトピックとして取り上げ、それを合入するものについては、それを前文性のもので捉えるより、前文を外界事象（の一部）としたものと捉えたほうが適当であると考えられる¹²⁾。3.1節とは文脈の一部が外界ではなく前文にあるという違いだけであるが、前文に合入内容があるため3.1節より予測性があり分析的である。しかし一方で、3.2節のような前文そのものの判断に比べると分析性は低い。

3.6 「A（前文）はB（分出内容）である」というシステムが顕在化しないものに、相手の発話に対する応答の位置

にあるにも関わらず、顕在化している前文(相手の発話)と「あ」の後続表現から、「AはBである」という判断の形を取り出せない例を検討する。

(16) 桜：保育園みつけたんだ

葵：ようやく。でも、仕事して梢の世話して、ちがやさんの面倒まで見る自信なくて

みくり：……

桜：育て方が悪くて、ごめんなさい

葵：あ、そういうつもりじゃ!

桜：私は専業主婦だったし、家事が趣味みたいなところがあったからやりすぎてたのかも (逃)

この例において「あ」に後続する「そういうつもりじゃ (ない) (B)」は、何 (A) が「そういうつもりじゃない」のか。例えば(7)の「魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁 (A)」が「魚醤である (B)」のように前文だけをAと考えることはできない。ここでのAは直前の相手の発話(前文)そのものというより、それを含む、話手自身の発話によって相手に謝らせた、相手を困らせた事態(外界事象)の総体をAと捉えたほうがよいと考えられる。次の例も同様である¹³⁾。

(17) トニー：例えばある会社があって「まだ実績をあげていない状態」つ

ていうのを一言でいう単語ない?

さおり：じ……実績をあげてない!?

なにそれ……むつかしーうーん

……ないと思うけど…… (でもあ

るかも知れないし……どう判断すればよいのか)

トニー：あ、いーよいーよなければ

……

さおり：ごめん…… (ダ)

この例も、話手がおこなった質問が、前文「なにそれ……むつかしーうーん……ないと思うけど」のように聞手を困らせている状況に対して、なければならないで構わない、答えは不要であるといった判断をおこなったと考えられる。

相手の反応が言語表現として表面化しない例もある。(18)では話手の発話に対する反応としての発話が出でこないことを「……」が示し、(19)では話手の発話に対して驚いていることを「!」で表現している¹⁴⁾。いずれも発話としては出ていないが、話手の発話とそれに対する非言語的な反応が文脈として合入され、「あ」の使用につながっていると考えられる。

(18) みくり：時間を分け合う……もしかしたら風見さんは、相手の気持ちも大事なんじゃないですか

風見：え?

みくり：相手を尊重してるからこそ、自分だけでなく相手の時間も同じように奪いたくない。自分勝手なようで実は、優しいのかもしれません

風見：……

みくり：あ。すいません、心理学部の癖で

風見：いえ、興味深い。奥さんは気になりませんか?結婚して自分の時間、減ったでしょう (逃)

(19) 栃男：風呂掃除もした!

みくり：どれくらい?

栃男：月に2回……だったかな

みくり・桜：え?

葵：たまの風呂掃除でドヤ顔されてもねえ

一同：！

(庭に葵と娘・梢、居て)

葵：あ、すいません。ついちがやさん
んを思い出して (逃)

ここで「あ」に後続する発話について考えてみたい。(16)では弁明、(17)では容認、(18)(19)では謝罪表現が「あ」に後続している。いずれも聞手への直接的な訴え表現である。ではこの場合の「あ」には何が内在しているのか。発話の展開から考えると、話手は、自身の前発話とそれに対する聞手の反応を受けて、弁明、容認、謝罪という否定的な方向への転換がなされている。すると、その間に発せられる「あ」は、自身の発話とそれに対する相手の反応から否定的な方向への反応を生起させる判断であると考えられる。つまり、「自身の発話とそれに対する相手の反応」を文脈(A)とし、それが「まずいものである」という判断(B)が考えられるのである。ここに挙げた例は、文脈を合入するが、その判断は潜在化し、その結果としての聞手への直接的弁明、容認、謝罪という情意性を持つ表現が後続する。直観的であり、非分析的な「あ」であると捉えられる。

3.7 3.5と3.6の中間例

次に挙げる例のように、自己の発話の「訂正」をおこなう発話の冒頭に「あ」が用いられる例がみられる。

(20)津崎：さすがに、嫁入り前の女性
を、住み込みというのは

みくり：ならいっそ、結婚しては！

津崎：!?

みくり：あっ、結婚といっても、就職という形の結婚というか

津崎：??? (逃)

(21)みくり：私は平匡さんが一番好き
ですけど

津崎：……

みくり：しみじみとしっくり、落ち
着いて

津崎：……

みくり：あ。好きって、変な意味
じゃなく！またしても突拍子もないことを

津崎：……

みくり：都会のキラキラより渋い方が好き
というか。すいません何を言っているのか

津崎：…… (逃)

これらは前文A(上記の例では話手自身の発話)の一部を取り上げ(二重下線部)、それに対する判断B(波線部)というように「AはBである」の形で取り出せる。しかしここで挙げる例が3.5節と違うのは、前文の後に相手の沈黙、「!?’」や「……」で表される反応が入ることである。これにより、ここで挙げる例は直感性に向かうことになる。前文がありながらも相手の沈黙等の反応という事態が加わり、それが併さってAとなり、直感性に近づくのである。形態的には3.5節の例と共通するものがあるが、相手の反応が差し挟まれることにより3.6節の直観性に近づく。そこでこれらの例を、その中間例と捉えておきたい。

4. まとめ

「あ」にはAの合入とBで分出されるAに対する「AはBである」という判断が内在している。これが「あ」に内在する意味である。その「あ」の運用効果につい

直観的判断

- ↑ 3.1 外界事象→判断
3.6 外界事象→(判断：Aはまずい)→聞手めあての情意表現(否定・謝罪等)
↕ 3.7 3.5と3.6の中間例(自己の発話の訂正)
3.5 外界事象(前文の一部)→トピックAに関する判断
↓ 3.2 前文→判断

分析的判断

て触れておくと、3.1節は、外界事象からの判断であることを明示するために「あ」を用い、3.2節は、「AはB(←A)である」を明示し、3.5節は「A」の存在から示すことで区切りマーカ―としての役割を担っている。また、3.6節は「Aはまずい」という意識があることの表明として「あ」が用いられている。その中間例が3.7節のものである¹⁵⁾。これらは、本頁の枠内に示すように、より直感的なものから、より分析的なものとして存する。3.1節でみたものが最も直感的であり、3.2節でみたものが最も分析的である。枠内は本稿各節の「あ」を直観的判断から分析的判断までのスケール上に乗せたものである。

ここで、促音化の意味するものについて言及すると、3.2節の分析的判断は促音化しづらい。3.1節や3.5節の例は必須ではないが、促音化する傾向がある。この違いはその判断が予め期待されたものであるか否かによると考えられる。そして促音化の有無に関わらず「あ」は根源的に「AはBである」という判断を内在するのである。

5. おわりに

本稿は、単音節語「あ」の根源的な機能を明らかにした。結論として、「あ」には、「AはBである」という判断が内在している。Aは前文または外界事象であり、

これが合入され、「あ」の内包の一部となる。合入されたAに対する判断Bも「あ」に内在しているが、これが分出し「あ」に後続する形で顕在化することがある。

「あ」は、その内在が言語そのものを受け取るもの(前文性のもの)である場合、分析的なものとなり、事態(外界事象)として受け取る場合、直感的なものとなる。このように「あ」は、その前文と後文の在り方により説明できるのである。

本稿では「あ」とその促音化したものについては言及したが、長音化した場合や、その他の単音節語の機能を検証することにより、本稿で捉えた「あ」の妥当性が確認され、また「あ」が単音節語全体の中でどのような位置を担うかが示されるであろう。これらについては今後の課題としたい。

注

- 1)「あ(感動詞)」は『新明解国語辞典第7版』において次のように記述されている。①呼びかけの声。「あ、君、ちょっと」②急に驚き(思い出し)などした時に出す、思わず発する声。(①②とも「ああ」「あっ」とも言う)

また、「デジタル大辞泉」では次のように記述されている。①何かを急に思い出したりしたときに思わず発する語。あっ。「あ、しまった」②呼びかけに

- 用いる語。はい。「主人あつと言えは郎等こと出づべき体なり」(盛衰記：六)
- ③応答に用いる語。はい。「いかがはせんとて、ただあつと、言請けをしめたり」(古本説話集：六七)。
- 2)「デジタル大辞泉」では「あっ」「えっ」「おっ」「わっ」のいずれも「驚いたとき」に発するものとされている。この4つの形式に共通していることを考えると、それは単音節語であることが持つ機能であると考えた方がよさそうである。
- 3) これは「あ」の中核的機能を効率的に抽出するためのデータ選択である。まずはこれで機能を提示し、今後、その結果を自然会話のデータで検証していきたい。
- 4) ドラマのシナリオ等で意図的、弁別的に「あっ」と表記された例については「あ」の促音化した例として扱う。
- 5) 「同定 (identification)」判断とは「刺激対象の知覚特性と連合する様相の異なる情報を取り出すこと」(中島他編1999)であり、次のように説明されている。「長い間会っていなかった知人と再会したとき、顔は覚えがあるのに、名前を思い出せない、という経験をすることがある。このような場合、名前を思い出すと、その知人が誰か同定できたことになる。つまり、知人の顔は“記憶”にある顔と知覚的に一致しており、その状態からさらに名前を呼び出すことによって同定が成立する」(p.631)
- 6) (6)の場合、「やった」は「間違えた」という事態を指すと考えられる。(5)(6)のように知覚事象が事態の場合、分出内容は「～した」「～してしまった」の文型で現れる例が多い。
- 7) 談話展開の在り方は(1)と(5)、(2)と(6)が対応している。尚、Bが分出しない(1)(5)の展開のパターンで「何」「どうした」以外の疑問詞(「どうして」や「どんな」等)は考えにくい。また、「あ、今日は宿題出す日だった。」といった自己の記憶の想起事象も同様のあり方であると考えられるが、記憶の想起事象をどのように捉えるかは今後の課題としたい。
- 8) 刺激は常に受けているが、それに反応するものとししないものがある。反応しないものを中立刺激と呼ぶのに対し、それによる反応が起きるものは弁別刺激と称される(小野2016)。但し、本稿が弁別刺激としているのは、その発話または外界事象が当該発話を誘発したという、あくまでも筆者の内省によるものである。厳密には、その刺激が当該の行動(発話)を誘発したことを実験等により確認して初めてそれを弁別刺激と呼ぶことができるのだが、本研究の段階ではその準備がないため、その確認については今後の課題としたい。
- 9) 例えば例文(6)で「あっ」を用いずに「またやった!」と発話することを指す。
- 10) 従来の意味記述で「あ」が驚きを表すとされたことについては、分析的判断の場合、予定された発話(前文)の合入であるため「驚き」が生じにくく、発話時に予期なく遭遇し、知覚した刺激に対する反応である直感的判断の場合、驚きという意味が生じやすくなるを考える。
- 11) 聞手の相槌の有無や発話間のポーズ、発話の意味的關係等の要因で畳み掛ける印象の生起は異なると思われる

- が、この検討は今後の課題としたい。
- 12) 前文も言語場で話手が知覚した事象の一部である。3.5節では前文の中から何を取り上げ、どう判断するかが話手に委ねられていることも3.1節の外件事象の場合と同様である。このことから本稿は前文を外件事象の一つと考える。
- 13) (17)では「さおり」の内省であると考えられる記述を()内に記した。
- 14) 「…」は沈黙を「！」は驚きを表すと考えられるが厳密にはその時の表情等の非言語情報から裏付ける必要がある。これについては今後の課題としたい。
- 15) 「あ」が運用された場合の具体的な働きは松岡(2018)で考察されている。

参考文献

- 小野浩一(2016)『行動の基礎 豊かな人間理解のために 改訂版』、培風館
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」、音声文法研究会編『文法と音声』、pp.257-279、くろしお出版
- 富樫純一(2005)「驚きを伝えるということ—感動詞『あっ』と『わっ』の分析を通して—」、串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話第1巻 活動としての文と発話』、pp.229-251、ひつじ書房
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司編(1999)『心理学辞典』、有斐閣
- 松岡みゆき(2018)「『あ』の中核的機能とその外延的事象について」、『名古屋大学 日本語・日本文化論集』25、pp.37-57、名古屋大学国際言語センター

- 松村明監修(2017年5月18日更新)『デジタル大辞泉』、小学館
- 森重敏(1959)『日本文法通論』、風間書房
- 森山卓郎(1996)「情動的感動詞考」、『語文』65、pp.51-62、大阪大学国語国文学会
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編(2017)『新明解国語辞典第7版』、三省堂

例文出典

- (い)いぬじゅん『いつか、眠りにつく日』スターツ出版
- (ダ)小栗佐多里『ダーリンは外国人』メディアファクトリー
- (ダ2)小栗佐多里『ダーリンは外国人2』メディアファクトリー
- (ダ頭2)小栗佐多里&トニー・ラズロ『ダーリンの頭人中2』メディアファクトリー
- (逃)野木亜紀子『逃げるは恥だが役に立つ シナリオブック』講談社

付記

投稿後、査読の先生方より有益なご指導を賜りましたことに深謝いたします。
(愛知文教大学)